

## 明治期日本語訳聖書における訳語「悪魔」について

尊田, 佐紀子  
九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/9359>

---

出版情報：語文研究. 91, pp.15-24, 2001-06-02. 九州大学国語国文学会  
バージョン：  
権利関係：

# 明治期日本語訳聖書における 訳語「悪魔」について

尊 田 佐紀子

## 1. はじめに

1880年（明治13年）に『新約全書』（新約聖書）が、また1882年（明治15年）から1887年（明治20年）にかけて旧約聖書が出版された。これらの日本語訳聖書は1872年横浜で開催された教派合同の宣教師会議において企画されたものであり、「翻訳委員会訳」と呼ばれる日本語訳聖書である。

当時の聖書と訳業についての様子が、『福音新報』1088号所収の井深梶之助氏の談話「新約聖書の日本語訳に就て」に詳しく述べられている。それによると、その翻訳委員はブラウン、ヘボン、グリーンであり、その補佐にそれぞれ高橋五郎、奥野昌綱、松山高吉があたっていた。

その訳業にあたって用いられた聖書が何であったかと言えば、井深氏の談話に「そのテーブルの上に開てある書物はブラオン氏とグリーン氏の前には二三種の希臘原文の聖書、ヘボン氏の前には英訳の新約註解書、日本人の前には文理や官話やその他の支那翻訳の聖書といふ風であつた様に記憶する」とあるように、ギリシア原典、英訳の注解書、文理訳・官話訳・その他の中国語訳聖書であった。

ギリシア原典はもとより、英語を母語とする委員たちが英訳を参考にするのは当然のことだが、中国語訳聖書がその場にあった、ということが、翻訳委員会訳の文体・語彙に大きな影響を与えている。井深氏の言う「文理や官話やその他の支那翻訳の聖書」とは、「代表訳」「ブリッジマン・カルバートソン訳（BC訳）」「官話訳」と呼ばれる中国語訳聖書であった。翻訳委員たちは、三種の中国語訳聖書のうち特に米国系のBC訳を重視したと言われている。

実際、語彙の面から見ても、翻訳委員会と代表訳・BC訳では一致する語が多く、森岡健二氏の調査によれば語形が一致（または一部一致）する率は77.7%にのぼる。中でもキリスト教用語の一致率は高く、実際に「天使」「福音」「聖書」などといった用語は、翻訳委員会訳と代表訳・BC訳とで語形が一致している。

しかし、〈悪魔〉の翻訳に関しては代表訳（「魔鬼」）・BC訳（「魔鬼」といった中国語訳聖書と、翻訳委員会訳（「悪魔」）では語形が一致していない。上述の〈天使〉などと違って、なぜ〈悪魔〉に関しては語形が異なっているのか。その背後にある文化的・宗教的背景を手がかりに、その理由を探ってみたい。

## 2. 〈悪魔〉とは何か

〈悪魔〉とは何なのか、まずその概念を規定したい。はじめに述べておかねばならないのは、〈悪魔〉には、大きく分けて二つの性質があり、ギリシア原典においては、その二種類の〈悪魔〉はそれぞれ別の語であらわされていた、ということである。

まず一つめの〈悪魔〉の性質は〈人に取り憑き災いをもたらす悪しきたましい〉というものである。旧約聖書では、ヘブライ語 ruah ra'ah (悪霊) であり、全ての疾病、殊に精神的病苦は〈神から来る悪霊〉によるものと信じられてきた。

新約聖書においては、大部分は人にはいり人につく悪霊、これがギリシア語 daimonion (神々と人類の間を取り持つ霊のこと)、pneuma poneron (邪悪な霊)、または akathartos pneuma (汚れた霊) という語であらわされる〈悪魔〉であった。生理的または精神的な種々の疾病は、しばしば悪霊によるものとされている。〈憑かれる〉というのは、悪霊の力の下にあるという意味で、種々の疾病に悩まされるとは、悪霊が肉体に入り人に憑いて疾病で悩ますことであり、それを癒すとは悪霊を追い出すことであった。すなわち、人に取り憑き災いをもたらす悪しきたましい、という性質を持った〈悪霊としての悪魔〉、それが〈悪魔〉の重要な一つの特徴であった。

二つめの〈悪魔〉は、「悪」の起源の不可解さと神秘さを説明するために生じた観念であり、誘惑者、虚言者、という性質を持った〈悪魔〉である。新約聖書では diabolos (非難者、中傷者という意味を持つ) とされた。

この性質の起源は、世界を善神と悪神、光と闇との闘争の場とみる古代ペルシア宗教の神話論的二元論にあるとされる。この二元論が原始キリスト教に影響して、神の光に満ちた創造世界に対抗する攪乱の要素、世界破壊原理をサタン(注8)およびその使者デーモンたちと見る表象が発生した。例えばアダムの墮罪は、蛇という表象で言い表される〈悪魔〉の誘惑と教唆によるもの、と解釈される。

つまりは、〈悪を表現し正しい道からの墮落を誘惑する悪魔〉、これが〈悪魔〉の二つ目の重要な特質なのである。

ただし、この二種類の〈悪魔〉は、欽定英語訳聖書 King James Version (KJV) (注9) においてはすでに混同されていた。例えば、マタイ 4 章第 1 節の〈悪を表現し正しい道からの墮落を誘惑する悪魔〉 diabolos が、KJV では devil と訳されているが、ルカ 11 章第 14 節の〈悪霊としての悪魔〉 daimonion も、KJV では devil と訳されている。すでに西欧において二種類の〈悪魔〉が混同されていたことは明らかである。

## 3. 翻訳委員会訳における二種類の〈悪魔〉

翻訳委員会訳では、〈悪を表現し正しい道からの墮落を誘惑する悪魔〉は「あくま悪魔」

(「<sup>さて</sup>偕<sup>せいれい</sup>イエス<sup>みちび</sup>聖<sup>あくま</sup>霊<sup>に</sup>導<sup>に</sup>かれ<sup>(diabolos)</sup>悪<sup>こころ</sup>魔<sup>ため</sup>に<sup>の</sup>試<sup>の</sup>み<sup>ゆけ</sup>られん<sup>を</sup>為<sup>に</sup>野<sup>に</sup>に<sup>往</sup>り」(マタイ4章第1節))、〈悪霊としての悪魔〉は「<sup>あくま</sup>悪<sup>おふし</sup>鬼<sup>あくま</sup>」(イエス<sup>おひだ</sup>瘡<sup>なる</sup>啞<sup>なる</sup>悪<sup>あくま</sup>鬼<sup>を</sup>を<sup>おひだ</sup>逐<sup>し</sup>出<sup>し</sup>けるに<sup>あくま</sup>悪<sup>(daimonion)</sup>鬼<sup>い</sup>で<sup>ゝ</sup>瘡<sup>も</sup>の<sup>い</sup>ひ<sup>しか</sup>ば<sup>人</sup>々<sup>おどろ</sup>駭<sup>け</sup>り」(ルカ11章第14節))とギリシア語原典に忠実に訳出されている。

それでは、中国語訳聖書ではどうだったのだろうか。翻訳委員会訳の席上にあつた代表訳・BC訳ともに、〈悪を表現し正しい道からの墮落を誘惑する悪魔〉は「魔鬼」(「聖神引耶蘇適野、見試於魔鬼 (diabolos)」(代表訳・マタイ4章第1節)、「當時、耶蘇被聖靈導之適野、致見試於魔鬼 (diabolos)」(BC訳・同))、〈悪霊としての悪魔〉は「鬼」(「耶蘇逐瘡鬼、鬼 (daimonion) 出、瘡者言、衆奇之」(代表訳・ルカ11章第14節)、「耶蘇逐一鬼、乃瘡者、鬼 (daimonion) 既出、瘡衆奇之」(BC訳・同))としている。

席上にあつたギリシア原典・英訳注解書・中国語訳聖書、そのうち、二種類の〈悪魔〉をそれぞれ別の語で表していたのはギリシア原典と中国語訳聖書であつた。〈悪魔〉に関しては、訳語が混同されていた英訳ではなく、ギリシア原典・中国語訳聖書の翻訳方針に従つたと見られる。

#### 4. 訳語「悪鬼」について

翻訳委員会訳で〈悪霊としての悪魔〉が「悪鬼」とされた理由を探るには、BC訳・代表訳の翻訳方針を考えてみるとよい。

「鬼」という字は、もともと「死人のたましい、祭られた死人の幽魂」という意味を持ち、確かに〈たましい〉という点で、〈悪霊としての悪魔〉と共通点を持つが、より詳細な理由を探るためには、マタイ12章第43節における〈悪霊としての悪魔〉をめぐる訳語を検証する必要がある。中国語訳聖書では、「邪神 (akathartos pneuma) 離人、遊行旱地、求安不得曰」(代表訳)、「夫汚鬼 (akathartos pneuma) 既離人、遊於旱地、求安不得」(BC訳)となっていた。

代表訳・BC訳がそれぞれ訳語「邪神」「汚鬼」を採用した理由には、プロテスタント中国語訳聖書における用語問題(ターム・クエスチョン)が関わっている。<sup>(注10)</sup>代表訳の共同事業が決議されて以降、主にtheosとpneumaの訳語をめぐる、「上帝」「(聖)神」を主張するロンドン伝道会のメドハースト、レグらと、「神」「(聖)霊」を主張する米国長老会のラウリー、米国聖公会のブーンらとの間で、所謂ターム・クエスチョン(用語問題)の論争が繰り広げられた。

pneumaの訳語に「神」を用いれば、「神」は悪霊や汚れた霊の訳にも用いることができるのでマタイ12章第43節のakathartos pneumaを「邪神」と訳することができる。これがメドハーストの意見であり、代表訳ではメドハーストの意見を採用してこの〈悪霊としての悪魔〉を「邪神」と訳している。

一方、ゴダード(代表委員を脱会している)が1847年に発表した考察に

pneuma の翻訳に対する意見が見られた。彼は「風」「鬼」「霊」のうち、どの語が最も pneuma とよく対応するかを検討し、「霊」は、pneuma に完全に一致しているとはいえないが、幾つかの重要な類似点があるので pneuma には「霊」を用いるのが良く、「鬼」は人の死後の<sup>(注12)</sup>霊及び他の霊的存在を表すのに用いられるが、それ自体に下等で墮落の観念を含んでいる、と述べた。つまり、当該部分(悪霊)のような場合は(「霊」は善良・卓越のような良い意味しか持たないので)「霊」を用いることができず、「汚鬼」のように「鬼」を用いるのが妥当だということになる。BC 訳はゴダードの主張と同じく pneuma を「霊」とし、akathartos pneuma のような(悪霊としての悪魔)には、「汚鬼」のように「鬼」を用いている。

日本での聖書和訳業においては、翻訳委員会は BC 訳の翻訳方針を踏襲して、theos を「神」、pneuma を「霊」とし、akathartos pneuma のような(悪霊)の時は「悪鬼」として<sup>(注13)</sup>いる。また、この場合「鬼」を用いた理由については、翻訳委員会の中心であったヘボンに手による『和英語林集成』初版(1868)和英の部では「ONI オニ A devil, demon. Syn. MA.」であるが、第二版(1872)では「ONI オニ A devil, demon, fiend, the spirit of one dead, a ghost; also an epithet for a powerful or bad man.」となり、the spirits of one dead (死んだものの霊魂)が加えられていることがその裏付けとなろう。

つまり、横浜の教派合同の宣教師会議が開催され、日本語訳聖書の出版が企画された1872年の段階で、ヘボンは「鬼」＝「死んだものの霊魂」という知識、前述のゴダードの「鬼」に関する見解と同様の知識を持ち始めていたのである。

ただし、(悪霊としての悪魔)を訳すとき、BC 訳では daimonion は「鬼」、akathartos pneuma は「汚鬼」と、訳語を一定させていないが、翻訳委員会訳では daimonion も akathartos pneuma も「悪鬼」とし、一つの訳語に統一している。その点において、翻訳委員会訳は、BC 訳の翻訳方針を踏襲しながらも、BC 訳よりも(悪霊としての悪魔)の訳語を統一しようとする意識が強かったものと思われる。

## 5. 訳語「悪魔」について

明治期の新漢語創出に大きな役割を果たした英華字典類は、翻訳委員会訳が訳語「悪魔」を採用した経緯には関係していない。なぜなら、日本への影響が大きかった以下の三字典とも、「魔鬼」は採用しているが、「悪魔」はどの字典も採用していないからである。

(R・モリソン英華字典(1820))

・DEVIL, is by the Mahomedans called 魔首; Seduced by the devil, 被

魔之誘; Devils, or bad celestial spirits, 天鬼; These opposed the deification of Sacya Budh.

- DEMON, 鬼, expressed by an evil spirit, 悪神; 魔鬼; 邪神; 悪鬼; 狂悖的悪神

(メドハースト英華字典 (1847))

- DEMON 鬼、魔、天怪、魔鬼、邪神、悪鬼、汚神、鬼魅 (後略)
- DEVIL 魔鬼、悪鬼、邪鬼 (後略)

(ロブシャイド英華字典 (1866-7))

- Demon, 鬼、魔鬼、邪神、鬼怪、妖精、汚神、悪鬼; the chief of demons, 鬼魁; demon and spirits, 鬼神
- Devil, an evil spirit or being, 鬼、魔鬼、悪鬼、邪鬼; the chief of the devils, 鬼魁、鬼頭

もともと「悪魔」という語は仏典語 (パーリ語 māra、サンスクリット語 māra (魔羅)) であり、く仏道を妨げる一切の悪神、仏に敵対する鬼神) のことであった。最初期仏教において、『相应部』経典中の「悪魔相应 (パーリ語 māra - samyuttam)」の中に悪魔の古い物語が収められている。

この「悪魔相应」中に、悪魔波旬が世尊波羅奈 (パーラナシー) に「汝は天と人との／悪魔の係蹄にかゝれり。／汝は悪魔の縄にて縛られぬ。／沙門よ、汝は未だ我より免れじ」と語り、世尊が「我は天と人との／悪魔の係蹄より脱れぬ。／我は悪魔の縛より脱れぬ。／破壊者よ、汝は敗れたり」と答える場面がある。<sup>(注14)</sup>

悪魔は「破壊者」と呼ばれ、世尊を墮落へと誘惑しようとしている。このく破壊者く墮落への誘惑」という点において、く悪を表現し正しい道からの墮落を誘惑する悪魔」と共通点を持っていた。

また、漢訳の仏典においても、東晋の帛尸梨蜜多羅訳の仏典「仏説灌頂経」に、仏陀のことばとして「使我来世摧伏悪魔及外道」とあり、māra の漢訳語「悪魔」が仏に敵対し降伏される存在となっている。

日本に目を転じると、まず『梁塵秘抄』に「不動明王恐しや、怒れる姿に剣を持ち、索を下げ、後に火焰燃へ上るとかやな、前には悪魔寄せじとて降魔の相」<sup>(注15)</sup> (巻第二 仏歌十二首) とあり、悪魔は仏に敵対する存在として書かれている。

また、謡曲『調伏曾我』にも「東方降三神明王は、降三神明王は、青蓮の臍に、悪魔を降伏して、壇上に翔給へば」<sup>(注17)</sup> とあり、日本において仏教的な文脈で用いられていた仏典語「悪魔」は、日本においても仏道からの引き離しを企む存在であり、神への信仰からの引き離しを企むキリスト教の悪魔と同様の役割を担っていたため、翻訳委員会訳ではく悪を表現し正しい道からの墮落を誘惑する悪魔」に「悪魔」という訳語を採用したのだと思われる。

しかしなぜ「魔鬼」という中国語訳をそのまま採用せずに、訳語「悪魔」を採用したのだろうか。翻訳委員会訳は、二種類の〈悪魔〉を原典に忠実に訳出していた。そのため、〈悪を表現し正しい道からの墮落を誘惑する悪魔〉を中国語訳聖書に倣って「魔鬼」とすれば、どちらの〈悪魔〉も「鬼」字を含むことになり、二種類の悪魔がともに「鬼（たましい）」という共通点を持つような誤解を生むおそれがある。その混同を避けるために、中国語訳聖書の「魔鬼」を採用せずに、日本にあった仏典語「悪魔」を訳語として採用したのだらう。<sup>(注18)</sup>この点において、〈悪を表現し正しい道からの墮落を誘惑する悪魔〉をも「鬼」字を含む訳語「魔鬼」を採用した中国語訳聖書とは一線を画している。

また、「魔鬼」よりも「悪魔」が日本人には分かり易いと判断した面もあろう。例えば、ヘボン・ブラウン訳と呼ばれる聖書<sup>(注19)</sup>では「さて耶蘇 あくまにこゝろミられんために たまに の野にみちびかれり」(マタイ4章第1節)のように、「悪魔」が仮名で書かれている。また翻訳委員会訳以前に翻訳された中村正直の『西国立志編』(明治4年出版)には「魔鬼ノ会堂ト為ルベキナリ」と、「魔鬼」に「あくま」とルビが振られている。

そこには、日本人には「魔鬼」は分かりにくく、「悪魔」は分かりやすいという両者の意識がうかがえる。だからこそヘボンは自らの私訳聖書で「あくま」と仮名を使うことができ、中村は(おそらくロプシャイドの字典を参考にした)「魔鬼」という語に、日本人に馴染み易い「あくま」というルビを振らなければならなかったのである。

馴染み易い語、という観点から考えると、翻訳委員会訳以前の日本語訳聖書で〈悪魔〉の訳語として採用されていた「鬼(おに)」がある。翻訳委員会訳で二種類の〈悪魔〉が原典に忠実に訳出されていたことは前述したが、それ以前の日本語訳聖書においては、以下のように二種類の〈悪魔〉はともに「鬼(おに)」と訳されてきた。

(ギユツラフ訳・ヨハネ13章第2節)<sup>(注21)</sup>

・フルマ井ドキニ、アニ(daimonion) ハ カリヨト□ニン ユダズシモンノ  
ハラニハイデ ガノヒトハ エズムラ ツゲタイ

(ベッテルハイム訳・ヨハネ13章第2節)<sup>(注22)</sup>

・ユウバンナテカラ ヨニ(daimonion) ヤ ヨダス イシカリヨテ スマン  
ガク

(ゴープル訳・マタイ4章1節)<sup>(注24)</sup>

・さて イエス おに(diabolos) ヽ そゝのかさるゝ やうに のべゑ ミ  
たまに さそわれ たまふた

また、ギュツラフとベッテルハイムが参考にし、ヘボンも見たことのある（手沢本あり）メドハーストによる語彙集『英和和英字彙』（1830）にも「Devil. O-ni. ヲニ」とある。

もともと日本の鬼は、<sup>(注25)</sup> 仏教の影響によって凶悪で威嚇の表情を積極的に持ち始めた。馬場あき子氏によれば、日本において鬼が造形化されていくのは、仏教の影響もあるが、「鬼門<sup>うしとら</sup>（艮）に居座するゆえ」という語呂合わせの俗説も考えられる、と言う。「かみ」「おに」の居所としては、民俗学では海の彼方や山のむこうに、一種の異郷を想定している。陰陽道では艮の隅（東北）を魔神の出入する方向としているが、これは鬼星のある方向でもあり、陰湿な北東の風〈鬼北〉と呼ばれる風の吹く方向である。この艮の方向を、牛と虎の要素より造形されてゆく鬼の塑像の原因にあてた俗説は、たぶん結果論的ではあるが、おそらく貴重この上ない虎皮の美への瞠目と、それをまとう者が持つであろう圧倒的な力への空想がなさしめたものとしておもしろい、との説が説かれて<sup>(注26)</sup>いる。

また、『訓蒙図彙』に「鬼<sup>(注27)</sup>（き）」の図が掲載されているが（図参照）、この図については和田正路の随筆『異説まちへ』（寛延元年（1748）八月奥書）に、「鬼の絵に虎の皮の腰あてを書く事、古法眼元信よりと云。訓蒙図彙にあり。絵は土佐風也。鬼の体着たるものなど別のもの也。今では夜叉といふも、獄卒<sup>(注28)</sup>といふも混じたるやう也。」とある。



『異説まちへ』の説の真偽のほどを確かめるすべは今はないが、仏教の影響や「艮」からの連想、また『山海経』からの影響などによって、鬼がだんだんと『訓蒙図彙』にあるような姿に造形化されていった、と考えて良いようである。

すなわち、日本では、鬼は上述のような様々な過程を経て造形化されていったものであり、当然日本人には非常に馴染み深い（もしかすると仏教における「悪魔」以上に）ものであった。

それにも関わらず、ヘボンは翻訳委員会訳では〈悪魔〉を「鬼（オニ）」とは訳さなかつた<sup>(注29)</sup>。なぜなのか、その理由を探るには、プロテスタント主義の聖書に対する態度を考慮に入れるのが有効である。

プロテスタントは、〈信仰のみ〉という原理を持つ。その原理はすなわち聖書



のみ (sola scripta) の原理に通ずる。そうすると〈悪魔〉は、聖書に書かれた〈悪魔〉のみが真実であって、民間の迷信と〈悪魔〉を結びつけることは、プロテスタント主義に基づけば大きな過ちとなるのである。

時代を通してさまざまなものと結びついて造形化されてゆき、日本人にとって想像 (image) しやすかった鬼、それをプロテスタントの「聖書のみ」という原理に照らして考えると、日本で「鬼」を〈悪魔〉の訳語として採用するのは著しく不適当だったのである。<sup>(注3)</sup>

## 6. おわりに

翻訳委員会訳は、二種類の〈悪魔〉をギリシア原典に忠実に訳出し、それぞれの〈悪魔〉の持つ性質を考慮した上で「悪鬼」「悪魔」という訳語を選定した。二種類の〈悪魔〉の性質の混同を避け、より日本人に分かりやすくするために中国語訳聖書の「魔鬼」はしりぞけられ、かつ、プロテスタントが持つ「聖書のみ」の原理に照らして「鬼」はしりぞけられたのである。それはキリスト教における〈悪魔〉のとらえ方、また、翻訳者自身の宗教的背景、さらに日本の文化的背景などが複雑に絡み合って訳語採用が行われた結果であった、と言えよう。

翻訳語の問題の本質は、このように様々な要素を複合的に考えなくては見えてこない。本稿では、このような個別的検証を行うことによって、その本質の一端をわずかながら示したつもりである。

注 1 旧約聖書は、複数の人間による分担翻訳という形をとり、『旧約聖書 創世記』(明治16年)『旧約聖書 詩編』(明治19年)等と分冊出版された。

2 「代表訳」「BC訳」のあらましについては土岐健治「邦訳聖書の源流としての漢訳聖書」(『月刊しにか』9月号、1993)に詳しい。1843年、英米各宣教師会(教派)の宣教師の代表たち(delegates)の共同作業による従来の中国語訳聖書に代わる新たな聖書改訳が企画され、1852年に「新約全書」が完成、「代表訳」(The Delegate's version)と呼ばれた。しかし、この過程で、まずバプテスト派の代表(委員)が辞任し、次いで、英国系と米国系の委員がtheosとpneumaの訳語を巡って対立し、いったんは妥協が成立したが、結局英国系委員と米国系委員は分裂し、英国系は1854年に「旧約全書」を刊行、米国系は1859年に新たな「新約全書」を、1862-3年に「旧約全書」を発行した。この米国系委員による翻訳が、訳業の中心的役割を担ったブリッジマンとカルバートソン二名の名により「ブリッジマン-カルバートソン訳(BC訳)」と呼ばれることになる。

3 代表訳・BC訳は「文理訳(Wenli)」と総称されるが、翻訳委員会訳で参照されたのは北京官話による「官話訳(Mandarin)」で、シェレシェフスキーの手による。その「新約全書」は1866年ないし8年頃完成、「旧約全書」は1874年にそれぞれ完成して出版された(合本は1878年)。本稿では官話訳は参照していない。

4 川島二郎「初期の日本語訳聖書と中国語訳聖書」(『月刊しにか』11月号、1993)に

- よる。
- 5 森岡健二編『近代語の成立・明治期語彙編』(1964、明治書院)中「新約聖書の和訳」による。
  - 6 ただし、森岡氏の調査ではBC訳と翻訳委員会訳のみが調査の対象で、他の中国語訳聖書は参照されていない。
  - 7 ただし、翻訳委員会訳は全ての〈悪魔〉を「悪魔」と訳したわけではなく、中国語訳聖書も全てを「魔鬼」と訳したわけではない。その理由については後述する。
  - 8 ただし、ヘブライ語のsatanはもともと「敵対者」以上の意味は持たなかったが、紀元前三百年以前に旧約聖書がギリシア語に訳された時、ヘブライ語satanをギリシア語diabolosに置き換えたアレクサンドリアのユダヤ人たちによって混同が始まった。
  - 9 イギリスの国王ジェームス一世が54人の学者を集めて翻訳にあたらせた英訳聖書である。7年の歳月をかけ1611年に出版された。
  - 10 〈悪霊としての悪魔〉の翻訳に関しては、中国語訳聖書のうちBC訳の翻訳方針を踏襲していた。詳しくは後述。
  - 11 鈴木広光「漢訳聖書におけるpneumaの翻訳について」(『キリスト教史学』49、1995)による。
  - 12 〈悪霊としての悪魔〉の訳語だったギリシア語daimonionは、もともと死んだ英雄の霊を表すことが多かった。
  - 13 「悪鬼(akathartos pneuma)人より<sup>いで</sup>出て<sup>かわき</sup>早たる<sup>ところ</sup>地を<sup>めぐ</sup>巡り<sup>やすき</sup>安息を<sup>もとむ</sup>求めども<sup>む</sup>得ずして<sup>いひ</sup>曰けるハ」(マタイ12章第43節)
  - 14 日本語訳は『南伝大蔵経』第十二巻相応部経典一による。
  - 15 本文は新日本古典文学大系56『梁塵秘抄 閑吟集・狂言歌謡』による。
  - 16 青い蓮華は仏眼の喩え。
  - 17 本文は日本古典文学大系41『謡曲集 下』による。
  - 18 しかし、日本には、取り憑いた悪霊を取り除くためのまじない「悪魔祓い」があった。例えば近松の浄瑠璃「出世景清」(貞享2年(1685)初演)に、小野姫が父である大宮司と夫の景清の無事を祈り、魔除けに弓を取る場面に「悪魔祓へと取る弓の」という表現があるし、榊本にも「悪魔祓」という榊(安永6年(1777)正月刊「春俗」)がある。また、「厄払」が唱える文句の中にも「イカナル悪魔ガ来ルトモ此厄払ガヒツトラヘ」という言い回しがあった。つまり日本の「悪魔」には「悪霊」という意味もあったのである。すなわち、〈悪を表現し正しい道からの墮落を誘惑する悪魔〉を「鬼」字を含まない「悪魔」と訳しても、日本人が二種類の〈悪魔〉の性質を混同してしまうという可能性は残っていた。
  - 19 『新約聖書馬太伝』。ヘボン、S・R・ブラウンが、バラ、タムソンらの協力を得た訳業を、前者の二人が完成させたものである。この『新約聖書馬太伝』は1873年に東京で刊行された。この作業は、ヘボンとブラウンはそれぞれ日本人教師に中国語訳聖書の書き下し文を作らせることから始まった。その際、代表訳とBC訳が参照されたが、書き下し文の底本となったのはBC訳である。中国語訳聖書への依存度は、文体・用字とも極めて高い。
  - 20 九州大学附属図書館蔵『西国立志編』(明治10年出版)による。
  - 21 『約翰福音之伝』。この書の翻訳は、ギュツラフによって1836年にマカオで尾張出身の三人の無学な漂流漁民相手に始められた。彼らは漢文を読めなかったし、ギュツラフ

自身も彼らから日本語を学んだ程度では、中国語訳聖書の書き下し文を作ることは出来なかった。訳語にも中国語訳聖書の影響を明確に見出せない。

- 22 アニ→ヲニか？
- 23 琉球訳『約翰伝福音書』。1847年訳了、1851年香港で出版。ベッテルハイムによる。
- 24 『摩太伝福音書』。1871年東京で出版。ゴープルによる。ゴープルはアメリカバプテスト派宣教師。彼は1862年日本人助手に、同じアメリカバプテスト派のゴダードの訳による中国語訳聖書『聖經新遺詔全書』（ゴダード訳と呼ばれる）の書き下し文を作らせた。この影響は平仮名分かち書きを主にした俗語訳の本書にも、文章、用字の上に多く見られる。BC訳も、ヘボンらとの対抗上参照されている。
- 25 馬場あき子『鬼の研究』（ちくま文庫、1988、筑摩書房）による。
- 26 また馬場氏は、鬼の造形化に寄与したその他の要因として、『山海経』にあらわれる獣皮をまとった山の主神を挙げている。
- 27 『近世文学資料類従 参考文献編4 訓蒙図彙』所収の複製による。
- 28 本文は『日本随筆大成 第九巻』による。
- 29 しかし『和英語林集成』では、すべての版で〈悪魔〉の日本語訳に「オニ」を採用している。聖書とは違って、辞書では多様な訳語を提示したのだと思われる。
- 30 また、日本の鬼が持つ性質自体が〈悪魔〉と異なっていた、という意見がルーサー・リンク『悪魔』（高山宏訳、1963、研究社）の訳者によって述べられている。「なるほどさまざまな種類の鬼はいるが（中略）第一すべての鬼が悪の存在でもない。それから鬼のどんな物語や絵、彫刻を見ても、仏陀を表す善き力に戦いを挑む鬼という表現はない。これらを考えてみると、日本で言う「鬼」が悪魔に当る存在ではないことは歴然としている。」（『悪魔』「日本の読者のために」中より）

（そんだ さきこ・本学大学院博士後期課程）